

第24回防衛セミナー 講演録

演題：大規模災害に備えて～災害対処の取組～

第1部 東日本大震災における自衛隊の活動の実態は！？

講師：自衛隊新潟地方協力本部長 吉田 賢一郎 1等陸佐

第2部 新潟県における危機管理について

講師：新潟県防災局危機対策課参事 澤野 一雄 様

【司会】

定刻となりましたので、ただいまより第24回防衛セミナーを開催させていただきます。それでは、主催者を代表いたしまして、北関東防衛局長の佐竹基より開会の挨拶を申し上げます。

【北関東防衛局長 挨拶】

皆さん、こんばんは。北関東防衛局長の佐竹でございます。本日は、ここに第24回防衛セミナーを開催させていただきました。まず、ご参加いただきまして御礼申し上げます。主催者を代表いたしまして、一言開演の前にご挨拶をさせていただきます。

私ども、北関東防衛局の役割の1つといたしまして、国の防衛について、ここにお集まりの国民の皆様方のご理解とご協力を深めるという仕事がございます。皆様にとって、防衛省・自衛隊というのは密接でありながら、場合によると遠い存在になりがちではないかと思えます。そこで、この防衛セミナーにつきましても、防衛省・自衛隊の仕事、任務というものを皆様にご理解いただく機会としたいと考えておりますので、今日、このようにセミナーを開催させていただいているわけでございます。

昨年、3月11日に東日本大震災が起きました。東北地方沿岸に大きな被害があったわけでございますけれども、長岡をはじめとするこの中越の地域につきましても、平成16年のの中越地震、平成19年の中越沖地震、それから、さらにその歴史を遡りますと昭和39年の新潟地震など、度々、地震等の被災をお受けになっているということがございます。それから、雨の被害でございますとか、大雪による雪害などございますので、今日お集まりの皆様は、私どもが想像し得ないようなご苦労を経験され、その度に様々なご苦労をされながら、災害を1つずつ乗り越えてこられているのだらうと存じます。東日本大震災の被災地では、多くの方が現在も大変不便なご生活を強いられておられるというふうに拝察いたします。本格的な復旧にはかなりの時間を要するのではないかと考えております。

他方、今年に入りましてから、首都圏直下型地震の被害想定の見直し、南海トラフ巨大地震の被害想定を発表なども関係省庁から相次ぎまして、防衛省といたしましても、大きな地震が来た場合の対応というものが、現実の課題となってきているというように考えております。

本日ご来場いただきました皆様には、それぞれ職場であるとか、あるいはご家庭、あるいは学校などにおきまして、災害対応についてそれぞれの問題意識をお持ちの方々にお集まりいただけたのではないかと思います。そういった観点も踏まえまして、本日の防衛セミナーでは、東日本大震災の災害派遣現場を身をもって体験された、吉田賢一郎・自衛隊新潟地方協力本部長から「東日本大震災における自衛隊の活動の実態は！？」という演題でご講演をいただきます。それから、県民の皆様方と深く関わる新潟県庁におきまして、災害対応危機管理の最前線で活躍されている、澤野一雄・新潟県防災局危機対策課参事から「新潟県における危機管理について」という演題でご講演をいただきます。

本日のセミナーを通じまして、防災への意識のあり方、それから災害が発生した場合の対応、そのあり方、それから自治体の皆様と私ども防衛省・自衛隊との連携といった様々な面につきまして、皆様のご理解を深めていただき、また、問題意識を喚起していただく機会となりますことを期待しております。

最後になりますが、今回セミナーを開催するにあたりまして、ご協力をいただきました関係各位の方に対し、この場をお借りしてお礼を申し上げて、私の挨拶とさせていただきます。本日は、この後もよろしくお願いいたします。

【司会】

続きまして、ご来賓の長岡市危機管理防災本部危機管理監・金子淳一様、ご挨拶をお願いします。

【長岡市危機管理防災本部危機管理監 挨拶】

皆さん、こんばんは。本来ですと、長岡市長がご挨拶を申し上げるべきところでございますけれども、今日は他の公務が入りました関係で、私が市長の方から挨拶文を預かってきておりますので、それを読み上げさせていただきますと思います。

『第24回防衛セミナーの開催にあたり、開催市を代表いたしまして、一言挨拶を申し上げます。はじめに、長岡市で開催いただいたことにつきまして、感謝を申し上げます。併せて、北関東防衛局の皆様には、日ごろの市政へのご協力につきまして、厚く御礼を申し上げます。

本セミナーは、自衛隊等の活動につきまして、地域の皆様を紹介いただき、理解を深めていただく機会と伺っております。

昨年の東日本大震災におきましては、多くの自衛隊員が被災地に派遣され、人命救助や災害復旧に取り組まれてきました。自衛隊の力は被災地の復興を通じた日本の再生にならなくてはならないものとなっております。

長岡市におきましては、平成16年に7.13水害、中越大震災と相次いで大きな災害に見舞われました。その度に自衛隊の皆様から人命救助や食事の提供、給水活動をは

じめとする生活支援など数多くの復興支援にあたっていただきました。この場をお借りして、改めて御礼を申し上げます。

本日は、第1部では、自衛隊新潟地方協力本部長・吉田1等陸佐から東日本大震災における自衛隊の活動状況について、また、第2部では新潟県の澤野参事から新潟県における危機管理について、貴重なお話などをお聞かせいただけるものと期待をいたしております。

結びに、防衛省並びに自衛隊の皆様方の身の安全と益々のご活躍、併せて、本日ご参加の皆様方のご健勝、また、被災地の1日も早い復旧、復興を祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。

平成24年10月15日 長岡市長 森 民夫 』

代読させていただきました。

【司会】

ありがとうございました。皆様、ステージの配置を変更いたしますので、しばらくお待ち下さい。

お待たせいたしました。それでは、第1部「東日本大震災における自衛隊の活動の実態は！？」について始めさせていただきます。

講師は、自衛隊新潟地方協力本部長・吉田賢一郎1等陸佐です。先般の3.11の東日本大震災において、前勤務地の青森県八戸市で連隊長として約2千人の隊員と共に、現地指揮官として、物資輸送、人命救助、被災者支援及び行方不明者捜索などで活動されてきました。この度「東日本大震災における自衛隊の活動の実態は！？」と銘打って自衛隊の活動の生々しい実態、そして災害派遣の体験談などをお話していただきます。それではご講演、よろしくお願いします。

【第1部 自衛隊新潟地方協力本部長 吉田賢一郎 1等陸佐】

皆さん、こんばんは。ご紹介をいただきました自衛隊新潟地方協力本部長の吉田でございます。今日は、森・長岡市長からいろいろお世話になっている、そして、また、市民の皆さん、近隣市町村の皆さんに大変お世話になっておりますので、そのご恩返しということでお話をさせていただきたいというふうに思っております。

さて、東日本大震災が発災をしましてからもう1年半以上が過ぎてしまいました。

今日、私はそれに関して、いろいろな話をさせていただきます。おそらく、報道等で聞いた話以外の知らない話がいっぱいあるというふうに思いますので、「へえ」とか「はあ」とかいうだけで終わらないように、ぜひとも1つの視点を持って、話を聞いていただきたいと思っています。それは何かと言いますと、東日本大震災の教訓であります。1時間弱ではありますが、皆さんの職場、家族、友人等の関係において、使えるものがいっぱいあるのではないかとこの観点で話を聞いていただければ、私の話も

役に立つのではないかと考えております。そういったことでお聞き願えたらと思います。

早速ではありますけれども、それでは始めます。

この度、東日本大震災におきまして被災された皆様、また、そのご家族の皆様、改めて心からお見舞いを申し上げます。

さて、今般の地震でありますけれども、地震、津波、そして原子力災害が複合した災害でありました。この未曾有の災害にあたりまして、自衛隊は、初めて陸海空自衛隊が1つになって、10万人という大変大規模な部隊でもってこの災害派遣にあたったわけです。まさに、弾は飛んで来ませんけれども、実弾のない有事、つまり戦争というふうに我々はとらえて、この緊急事態にあたって日本を守れるのは自衛隊だとの強い責任感を持って、今回の災害派遣に取り組んだわけでありました。報道等でもご承知のとおり、行方不明者の捜索、瓦礫の除去、物資の輸送、給食・給水支援等、様々な活動に今回取り組みました。そして、1日も早く絶望に打ちひしがれた被災者の皆さんに笑顔を取り戻してもらいたいという一念で災害派遣活動にあたったわけでありました。

今日は、そんな活動の中での経験談を皆さんにご紹介する前に、既に一年半以上経ってしまったということで、まずは第1部ということで、簡単に東日本大震災はどうだったのかという復習を実施いたします。その後、第2部で、私の体験談について話をさせていただきます。ちなみに、私がこの新潟にまいりましたのは、昨年4月20日です。もともと4月1日に異動する予定でありましたけれども、3月11日に発災いたしましたので、すぐに災害派遣現場に行ったということです。異動も延期になりまして、1か月半に満たない期間活動いたしました。その間の体験談という話です。

まず、東日本大震災と自衛隊の活動の特徴ということです。東日本大震災の特徴は、地震、津波、そして原子力災害が複合した災害であったということです。

そして、東北から関東までの大変広い地域に被害が分散をしておりました。

皆さんもご承知のとおり、阪神淡路大震災や新潟で起きた中越地震・中越沖地震は、地域的には比較的小さなエリアであります。今回は三陸沿岸全てが壊れているという状況で、これを勝手に、「災害ベルト地帯」と申し上げておりましたけれども、まさに一様に壊れているという状況でした。

それに加えて、自治体が壊滅的な被害を受けているということです。

災害に関わる責任は、基本的には各自治体があります。しかし、とてもじゃないけど手に余る。こんな時には、「自衛隊助けて」ということで、いわゆる災害派遣の要請をいたします。ところが、その災害派遣を要請する自治体が壊れているという状況、とにかくニーズ元がないという状況ですから、我々はやるべきことは何かということ自身で考えながら、手探りの中で災害派遣に臨み、その機能喪失している状況を補填しながら、災害派遣を実施していたというのが実態でありました。

自衛隊の活動の特徴でありますけれども、これも冒頭申し上げましたように、最大規模約10万人であります。そして、地震と原発という非常に特性の違うものを同時に対

応しないといけないという難しさがありました。

それから、おそらくご存じない方もおられると思いますが、予備自衛官、即応予備自衛官という方々が初めて災害招集を受けました。

予備自衛官というのは、簡単に申し上げますと、元自衛官であります。自衛官は54歳で退職いたしますので、その後、普通の会社に勤める、あるいは自営業をされている方もおられます。こんな方を災害招集ということで呼び集めます。「いざ鎌倉へ」という感じでしょうか。このような方々は今回初めて招集されました。全国で約2千5百人の方々が招集を受けて、実際に現役自衛官と共に活動いたしました。

それから、自衛隊と米軍との緊密な連携があったことです。先ほどは複合災害と書いてありましたが、複合事態とも書いてあります。何かと申し上げますと、実は自衛隊にとっては複合事態でありました。もともと自衛隊は、国を守る防衛が任務であります。今この時点で、日本の空・海・陸を守っております。そんな中であって、さらに災害派遣ということで、2重の任務を遂行することは、我々にとっても大変過酷なものであります。そんな中、米国は緊密な連携をとって助けてくれたということでもあります。

さて、経過の概要を簡単に説明いたします。3月11日14時46分。地震が発生いたしました。それからたった4分後、防衛省の中には、災害対策本部が設置をされました。あつという間です。そのくらい準備をしていました。今から4年前になりますが、私が青森の連隊長に着任した2008年、もうこの時から訓練をやっていました。月に1回は、呼び出し訓練、呼集訓練です。よく災害訓練で行う訓練です。月に1回呼び出します。どこにいても、その電話がかかってくる「集まれ」というのです。これも普段の日にやっても仕方がないので、休みを狙って行います。休みといえば、奥さんと手を繋いで買い物に行っている場合もありますし、子供さんと遊んでいる場合もあるわけですが、そんな時でも電話がかかってくる「すぐに来い」という訓練です。そして、2カ月に1回は実際に実働訓練を行っていました。集まるだけではなくて、実際に物を積んで、トラックで災害派遣現場を模擬したような所で訓練する。これも自衛隊のみならず、関係市町村と一緒に合同訓練です。年間にすると、20回近く訓練を積み重ねていました。ですから、我々にとってはオートマチックです。地震が発災したら、すぐに対策本部が立ち上げられたということです。

各県からの災害派遣の要請が出ましたけれども、我々はもう既に活動を開始しておりました。これは、実は今から17年前の阪神淡路大震災の教訓反省によるものであります。当時、自衛隊は地震が起きても災害派遣の要請があるまで、駐屯地で待機していました。ご記憶の方もありますが、その後、大変な非難を受けました。「自衛隊は災害要請がこないと活動しないのか」ということで、それ以来、これが改められまして、震度5弱以上になりましたら、自動的に活動を開始するということになりました。この時も既に活動を開始しております。

災害発生から3時間後には、防衛省から正規な地震・津波災害に対する命令、さらに、

それから1時間半後には、原子力災害に関する命令ということで立て続けに命令が出ました。これを見てお分かりのとおり、2つの命令、2つの任務、そして2つの組織を作ります。後ほど説明をいたします。

12日、そして14日、福島第1原発1号機と3号機がそれぞれ水素爆発をするわけです。これは大変だということで、当時3万人体制から5万人、5万人から10万人と、その規模が拡大していきます。そして、13日に10万人ということで、概ね決着がつきまして、14日、陸上自衛隊東北方面総監・君塚陸将、この方が今回の10万人のリーダーに指名を受けました。この君塚陸将は、現在は陸上幕僚長でございます。

話を戻しますが、16日、先ほども紹介したように予備自衛官、即応予備自衛官が、史上初、災害招集を受けることとなりました。発災してから1週間足らずでありましたけれども、これをもって半年以上にも及ぶ災害派遣の態勢が整いました。

自衛隊の活動ということで、3月12日の状況であります。地震が起きた翌日です。この時の状況は、まだ隊員は3万人です。東北地区に集まりましたが、先ほどの東北方面総監はここ（東北地区）を管轄する総監であります。福島県から青森県、もともとここには部隊があります。6師団と9師団。合わせますと2万人おります。ですから、3万人ですから、3万人引く2万人で、1万人がどこからか来たということですが、どこから来たかといいますと関東地区からです。新潟県の部隊も含まれております。新潟県には、ご存じのとおり新発田、そして高田に部隊があります。これらの部隊は、3月11日夜の24時、それぞれ部隊を出発しまして、現地に続々と向かっております。

先に派遣された先遣部隊は何をするかと言いますと、まず人命救助が第一です。そして、これから活動する災害現場の状況をしっかりと解明していきます。さらに、あとから主力部隊がまいりますので、主力部隊のための陣地の偵察です。そして、関係市町村と「これから何を始めようか」ということでの協議に入っていくわけです。このために、1万人が一晩にして集まって来たということです。

これは、5月1日です。もう、災害が発生しまして1か月半弱経っている時です。もうこの時には10万人です。10万人に達したのは、3月19日です。発災して8日後です。10万人の内訳ですが、陸上自衛隊約7万人、海上自衛隊は、人員が14,200人。海上自衛隊ですから船を持っています、船舶53隻、さらに飛行機が200機です。航空自衛隊は、21,600人に航空機が220機、この中にはヘリコプター等も入っております。それに加えて、先ほど言ったように、原子力専門部隊が約500人、そして、米軍が約1,400人活動していると、こんな状態です。

次に、隊員がどのように集まって来たかという話をします。大体これも想像どおりです。北は北海道から南は九州・沖縄まで全国各地から集まってまいりました。それぞれ、陸路・空路、海路を使って集まって来ました。大体12日から13日の間にはもう出発をしております。

私がおりましたのは、青森県八戸市です。三沢と書いてありますが三沢空港はご存じ

でしょうか。航空自衛隊、米軍基地もございます。この三沢から南に下がって40km、八戸という太平洋側に面した港町がございます。ここに隊員が2千人駐屯をしております。私はその駐屯地指令をやっておりました。

そこに、北海道から続々と隊員が集結を始めました。どのくらい集まって来たかというところ、もともと2千人いる駐屯地にさらに3千人が集まって来ました。2千人プラス3千人で5千人。ですから、もう駐屯地が膨れあがってしまう、そんな状況でありました。続々と隊員が集まって来て、そして災害現場の状況を解明した後に、次々と現地に投入されていったということです。

冒頭申し上げました統合任務部隊10万人体制とは、このような図式になっております。内閣総理大臣、防衛大臣の下に2つの任務、2つの組織を作りました。

1つが地震津波災害部隊。もう1つが原子力災害部隊。性質を異にしますので、部隊を分けました。こちら側が約10万人です。統合任務部隊指揮官は、先ほど言ったとおり東北方面総監です。そして、陸・海・空自衛隊を1人の指揮官が束ねる。3人兄弟にさらにお兄ちゃんがいて、弟たちに言うことを聞かせると、こんな意味でいいかと思えます。これによって迅速性・効率性を高めて、速やかに災害派遣にあたれるという状況です。

一方で、こちらは原子力災害ですから、専門的な分野ということで、別にして約500人の組織を作って対応いたしました。

活動の概要であります。これもご存じのとおりであります。人命救助に至っては、地震津波災害正面であります。約1万9千人の方々を自衛隊が救出いたしました。救出された方全体の約72%を自衛隊が救出しました。そして、行方不明者の捜索、残念なことでありますが、約1万体的ご遺体を収容いたしました。そして、お風呂や水や食事などの生活支援や、瓦礫の除去等、私も全部行ってまいりました。

それから、原子力災害正面であります。空中からヘリコプターが原子炉を冷やすために水をかける空中放水を3月17日から実施しました。そして、地上からも消防車で水をかける地上放水を実施し、さらに、テレビでは防護服と言っておりましたけれども、こういった白い服を着て、そして防塵マスクをして、一時帰宅をされていた福島県の皆さんのお手伝いを自衛隊が行っていました。我々はこれを除染活動と言っていましたが、こういった除染活動ももちろん行いました。

そして、1ヶ月遅れで始まりました行方不明者の捜索です。新潟からまいりました、新発田、そして高田の部隊は、主にこの原子力正面、福島正面の災害派遣に向かいました。

こんな活動をずらっと書き並べたら、これだけあるということになります。地震津波災害正面、原子力災害正面です。地震津波災害正面でも16項目くらいあるということです。

最後に、被災された皆さんの心をいやすということで、こういった音楽演奏も行いま

した。以上、駆け足でありましたけれども、大体これが概要であります。本当はもう少し細かくいろいろありますが、私の体験談の方をちょっと重視しまして、話をしたいと思っております。

これからは私の話と関係なく、このスライドが勝手に動きますので、スライドを見ながら、そして話を聞きながら、そして時折涙を拭きながら、話を聞いていただきたいと思えます。

それでは、第2部ということで話していきたいと思えます。

紹介でもありましたように、私は発災当時八戸におりました。八戸の部隊は、実は災害派遣計画上では、岩手県に行く予定でした。三陸沖地震の被害想定では、青森県には被害がないという想定だったのです。ところが、地震が起きたら、やはり津波がきたのです。皆さんもご承知だと思いますが、気象庁が出しました大津波警報。北海道から沖縄まで沿岸は真っ赤でした。あんな状況で、「今から岩手に行くから」なんてことは言えません。まず、自分の地元の災害派遣に行こうということで計画を変更し、すぐに向かったのが八戸の港でした。

八戸にも津波がきました。ただ、それほど大きくはなかったです。震源地から大分離れていたことと、遠浅ではないということで、津波そのものの威力は少し減退していました。津波がきて家に流れ込む、押し込むというようなことはありましたけれども、家が大きく流れられるということはありませんでした。行方不明者1人、亡くなられた方1人ということで、被害は比較的少なかったです。ですから、我々が最初に実施したのは人命救助でも、行方不明者捜索でもありません。まず、港の後片付けに向かったわけですが、それには、狙いがありました。当時、東北のど真ん中の仙台がやられてしまいました。当然、そこは止まってしまって、そこから先、道路も鉄道も止まっています。そうしますと、だんだんお分かりと思いますが、物流がストップしていますので、物不足になっていきます。全国から集まってくる救援物資が一切届かなくなりますので、これでは困ります。復興そのものが進まない、何とかしようということで、我々が取り組んだのが港の後片付けです。つまり、海から物資を入れようということです。八戸は70年の歴史を持つ大変古い港町。港にはタンカーなんかも横付けできます。ですから、そこにまず物を運び入れようということで、約10日間、頼まれもせず、徹底的に港の後片付けをやりました。そうしたことによって、船が入るようになり、そしてタンカーも入るようになったことで、ガソリンが入って、そして車が動き出して、物が流れるようになったということで、この作戦は大成功ということでもあります。

そんな折に、私の肩をポンポンとたたく上司がいました。「吉田、お前もそろそろ終わっただろ、次に行け」ということで、行った先がもともとの計画どおりの岩手県釜石で、釜石からさらに北に上がって約10km、鶴住居町に私は派遣をされました。そうしましたら、まさにこんな光景でした。私はここに何度も何度も行って訓練をしていました。もともと、災害が起きたら必ずそこに行くというようなことで訓練をしていたので、

いつも行っている所でした。ですから、大体あの辺にコンビニエンスストアがあって、この辺にガソリンスタンドがあってと記憶があるところでしたが、行ってみたら何の目印もない。「一体ここはどこだ」というぐらいに酷い状況でした。そして臭いもありました。こんな状況の中で、ほとんど呆然と立ちすくんだという記憶があります。10日遅れで鶴住居町に入りましたが、その後10日間、行方不明者の捜索を実施しました。我々はもう捜しに捜し尽くすまで捜しました。そして、最後は町の皆さんに来ていただきまして、ここまでやっていますということを見ていただきました。最後にやったのは、隊員が両手間隔に手を広げて、お互いが触れあうぐらいの広さに横一線に広がって、そしてそのまま「前へ進め」でずっと進んで行って1km、2km、3km…「回れ右」また1km、2km、3km…いわゆる掃討作戦、何度も何度も往復して徹底的に捜しました。それを見ていただいて、最後は市民の皆さんに「もうこれだけやっていただいたら結構です」と、「ありがとうございます」と言っていただくまで捜し続けました。途中、瓦礫等を除去しながら、最後はご納得いただく状況まで徹底的に捜しました。そして、行方不明者捜索について、町の皆さんの合意をいただきまして、打ち切りましょうということとなりました。

そんな時、私の上司はまた肩をポンポンと叩いて、「行方不明者の捜索はもういいから、次へ行け」ということで、次に釜石市内に戻りました。ここも、もともと行く予定だった所であり、よく知っておりましたけれども、釜石市内も大変な被害でありました。釜石市内には60の避難箇所がありましたが、その内の半分の30箇所を私が担当いたしました。物資輸送を行いました。これぐらいの大きさの避難所や大きな体育館などに物を届ける係です。必要な物を必要なときに必要なだけ届ける。宅配便みたいな仕事です。

ただ、だんだんやっているうちに変わっていったことがあります。1つ紹介したいと思いますが、当初は物を運んでいるだけでした。ところが、大体大きさも同じ、避難されている人数も同じ、男女別も同じ、年齢層も同じような避難所であれば、届ける物資の量も普通は同じはずが、比較してみると違うということが分かりました。極端に半分くらい少ないところがあったのです。「何で」ということで、我々もそれについて調べました。そうしたら、驚くべきことが分かりました。なんと、片方の避難所は我慢をしていました。物資を我慢していたのです。信じられないと思いますが本当の話です。これには特徴がありました。我慢しないで普通に要望している方は、地域の皆さんが近くに寄ってきた避難所でした。もちろん当時インフラは全部止まっていますから、ガスも水道も電気も止まっていますので、避難所に集まってきて、避難所生活をしている方も多かったです。地域の皆さんですから、お互いをよく知っていらっしゃる。普段から災害訓練でも顔見知り。ですから話しやすい。ところが、もう一方の避難所はそうではありませんでした。遠くからバスで連れてこられて、誰だか分からない人たちがばかりが体育館に押し込められてしまったのです。ですから、右を向いても左を向いても分から

ない人たちばかりで、話す相手がいないという環境でした。ですから、要望もぼつりぼつりとしか出てこなくて、皆さんが我慢をされているということが分かりました。これはいけないということで、それまでは、避難所の入口に受付がありまして、今日はどんな物がほしいですかとリストをいただいて、そのリストに基づいて物を運び入れましたが、そういうやり方をやめようということで、それからは、自分たちも靴を脱いで、帽子を脱いで、避難所の中に入っていってお話を1人ずつ聞きました。そうしたら、やはり皆さん我慢されていた分、いろいろな要望が出てきて、あれよあれよという間に要望がぐんと増えていきました。

そして、要望をお聞きする中で、単に物がほしいというだけではなくて、ご家族、肉親を自分の見ている前で亡くされた方もおられ、それまで誰にも言えなかった思いも話し出されて、話をお聞きする。それで、自衛官が来て話を聞いてくれたと喜ばれる。こんな中で、頼まれないうちに、我々は傾聴ボランティアという話を聞くだけのボランティアがあるのですが、そういったことまで引き受けて実施していました。

また、町に対する要望事項もいろいろありました。あれを変えてくれ、もっとこうしてほしい、そんな話も我々が承って、私がまとめて、直接当時の釜石市の野田市長にお渡ししました。そしたら、「こんなことまで自衛隊はやってくれるのか」と言われて、「これは避難されている皆さんの要望ですからぜひ受け取って下さい」と市長に言って、それ以来、被災された皆さんとのパイプ役を自衛隊がやるようになりました。非常に有効な復興支援に繋がったのではないかとということで、一例としてお話をいたしました。

1か月半にも満たない短期間ではありましたが、3つの災害派遣現場を転々として、いろいろな災害派遣活動をしたという概要の話であります。そんな中でいろいろなエピソードがありますが、時間の都合上、全部説明するわけにもいかないので、今日はその中で、特にということをお皆さんにご紹介させていただきます。

冒頭申し上げましたように、私がこの新潟にまいりましたのが昨年4月20日です。その時以来、いろいろな方に災害現場からまいりましたということでお話をしたところ、皆さんからいろいろなことを聞かれました。その話をまとめていくと、皆さんの興味関心がある話が大体3つございました。

そのうちの1つが、行方不明者の捜索は大変だと思いますが、どんなご苦労があったのですかという話です。皆さんが想像されているとおりでありますけれども、大変なことでありました。

そして、2つ目が、大変な仕事をやっている隊員の心のケア、これもちゃんとやらないと駄目なんじゃないですかという話です。いくら頑丈な、屈強な自衛官であっても、やはりメンタルもちゃんとやらないと駄目でしょうということです。いわゆるメンタルヘルスケアです。こういったことに関心を持たれている方も多かったです。

それから3つ目は、半年以上にも及ぶこの災害派遣が続けられた、いわゆるモチベーションについてです。これをどうやって維持しているのか非常に不思議だと皆さんから

聞かれました。特に企業主さんが多かったです。社員のモチベーションをいかに上げるかというところで苦労されていると思われませんが、ぜひ聞きたいと言われました。

今日は、この3つの話を簡単にまとめてお話したいと思います。

まず、第1番目に、行方不明者の捜索は大変だという話についてですが、事細かにする話でもありませんが、大変な苦労がありました。とにかく、地震で家が潰れた場合は、その下に行方不明者の方がおられるのですが、津波の場合は、押し波引き波でぐちゃぐちゃになってしまいます。ゴミ箱をひっくり返したような状況です。何がどうなっているのか分からないという状況で、そこに確かに家があるが、その家がそもそもここにあったのかということも分かりません。ですから、我々は命がけでその中を捜索しました。当然、傾いている家もありました。余震の恐怖もありました。ですから、隊員も真剣でした。そんな中で、我々は、行方不明者の捜索を徹底して実施しました。地震発生の3日後に、当時の北澤防衛大臣が仙台入りをしました。そして、主要な幹部を集めて訓示をされました。その時の訓示は忘れません。「これから、行方不明者の捜索、大変多くのご遺体を收容することになるだろう。しかし、我々はご遺体をご遺体と思って扱ってはならない。生きている人間だと思って扱いなさい。」というふうに訓示をされました。我々もそのとおりにいたしました。瓦礫を1枚1枚剥がしながら、そしてご遺体を発見する。ご遺体を丁寧にシートに包み、自衛隊の大きなトラックに1台1両に、ご遺体を1体ずつ乗せて運びました。決して、2体3体4体…ましてや重ねるなんて冗談じゃない。そんなことはしません。ご遺体を1体ずつ運びました。ただ、唯一並べて運んだ場合もありました。間違いなくご家族だという時です。こんな時は、最後は一緒に行こうということで、並べてお運びしたこともございました。そして、遺体安置所にお持ちして、通常であれば警察や消防の方がおられて、お引き渡しするのですが、そういう機能もほとんどないような状態でありましたので、自衛隊が随分肩代わりをさせていただきました。身元の確認ということで、遺体の洗浄とって、遺体をきれいに洗い流すとか拭き取る作業も自衛隊がやりました。そして、棺に入れる。さらに、棺もいつまでも入れておくわけにもいかないので、しまいには土葬にするということで、お墓まで自衛隊が掘りました。さらに、土葬は耐えられないというご家族の方もおられて、ぜひ火葬にしてくれということで、日本海側の山形県とか秋田県の火葬場までお持ちして火葬したということまで自衛隊が実施をしました。これは、少なくとも自衛隊の仕事ではないのですが、現場には自衛隊しかいませんので、頼まれたら嫌とは言えません。そのようなご遺体の捜索、行方不明者の捜索等、様々な体験を私もいたしました。最も厳しいのは、やはりご家族がおられる状況が一番心を痛めました。普段は、これは仕事だと思いついで淡々とやるのですが、やはりご家族がいるとそういうわけにはいきませんでした。1つの例を紹介します。これは私の体験談ではないのですが、紹介したいと思います。

3歳の男の子が行方不明でした。もう、行方不明になってから1ヶ月以上が経って

るということで、お母さんが捜していらっしやるということも我々は知っていました。そのお子さんが発見をされ、お母さんにすぐに連絡した。するとお母さんが飛んできました。そして、小さなお子さんですから遺体袋という袋に入っているのですが、その隙間から衣服が見えて、その衣服を見たときに、お母さんは「私の子です」とすぐに分かったそうです。そして、そのお母さんが最後にどうしても自分の息子を抱きたいとおっしゃるので、抱っこしていただきました。そうしたら、お母さんがこう言ったそうです。「よかったね、自衛隊さんたちが助けてくれたのよ。おまえも今度生まれ変わって大きくなったら、自衛隊に入れてもらおうね。」その場に立っていた自衛官全員が号泣だったそうです。もう、こういう状況で、悲しい場面が毎日のように何度も何度もありました。想像すれば悲しい映画を1日に何本も見ると同じくらいです。こんなつらい心をなんとかしないと我々も仕事にならないです。

2つ目の話は、まさにこういったことに触れた隊員の心のケア。これをなんとかしないと、とてもじゃないけど明日仕事にならない。これをなんとかしようということで、我々も最大限努力しました。

自衛隊にも心のケア、カウンセラーがいます。でも、いくら集めても10万人のカウンセリングはできません。毎日やっても終わらないくらいですから、何とかしなければということで、我々も考えました。皆様もご承知のとおり、自衛隊は国際平和協力活動、いわゆるPKO活動を今までもかなりやっております。大体3か月、もしくは半年くらいの活動期間を終えて隊員が戻ってまいります。こんな時に、3週間くらい休暇を与えます。これは、ご苦労さんの休暇ではないです。とにかく休めという休暇です。なぜかといいますと、こういった現場に行きますと興奮状態になるそうです。私も体験しましたが、現場に行った途端にスイッチが入るのです。やらなければいけないと責任感がぐっと上がります。そして、現場を出れば自然にスイッチが抜ける。ところが、それを毎日のように何度も何度もやっているうちに、スイッチが切れなくなってしまうのです。火事場の馬鹿力がずっと続いている状態です。自分で思わぬ力が出ている状態がずっと続いていたら当然疲れますから、疲れないように早くスイッチを切ってあげないといけないのです。これを我々の専門用語でクールダウンといいます。国際平和協力活動で帰ってきた隊員は、そのスイッチが入ったままだと疲れてしまいますので、とにかく休めということで、スイッチを切らせるためのそんな休暇を与えます。このクールダウンを災害現場でもやりたかったのですができません。大体1週間から10日間くらい現場に行くと、1日か2日戻って来て洗濯などをして、休養して、そしてまた現場に戻るという繰り返しの中で、3週間の休暇なんて取れるわけありません。そこで、毎日ちょっとずつやろうということで、これを称して、ミニクールダウンです。ちょっとずつ頭を冷やすということです。何をするかといいますと、夜、隊員は、電気の点けられない災害現場のテントに戻って休憩しますが、こんな時、隊員が車座になって話し合いの会をします。これがミニクールダウンです。とにかく、見たもの、聞いたもの、感じたものを

何でもいいからしゃべるといふものです。これをする事によって、ずいぶんと気持ちが楽になります。例えば、行方不明者の捜索をやって、やはり見たくないものも見ます。当然、食事が取れないという場合もあります。ところが、自衛官は責任感が強いので、自分が食事をしていないということを隊員同士で言わない。黙っている。恥ずかしいことだと思ってしまう。俺は自衛官だからそんなはずがない、そうある自分が嫌だという理由で黙ってしまいます。あるいは眠れないということがあっても言わない。それがずっと積もっていくと、そのうち爆発してしまいます。そこで、とにかく話せと伝えましたら、お互いに話し始めました。東北の方ですから無口です。ですから、ぼつりぼつりと話していました。そうしましたら「俺、飯食えねんだ」、「なんだ、俺もだ」、「俺、眠れねんだ」、「俺もだ」、「お前もか」、これで一気に気が楽になったそうです。そうやって話す事によって、皆が俺も気が弱いところがあるけど、俺ばかりじゃないのだということに気付いて楽になったというのです。ちなみに、毎日ではありませんけれども、未だにこのクールダウンをやっています。もう、1年以上前に撤退して、現在は、駐屯地に戻って通常の訓練をやっていますが、そんな時でもやはり思い出したりというフラッシュバックが起こります。そこで、毎日ではありませんけれども、1ヶ月に1回くらいの単位で、隊員同士で「今どう」とか「お前夢見る」などの話をしながら、少しずつ気持ちをほぐしていくというような事に未だに取り組んでいます。

3つ目の話に移ります。いわゆるモチベーションについてです。半年以上も続いた災害派遣期間中、よく頑張れましたねという話です。先日、ある方に、「自衛隊の方ってすごいですよね。もしかしたらロボットですか」ということを言われました。そんなわけではないです。淡々と黙々とやる自衛官の姿を見て、褒め言葉としてロボットですかと言ってくれたのかもしれませんが、とんでもない、そんなことはありません。仕事であってもできることとできないことがあります。そうはいいいながらもやらないといけないことがある。そんな時に、我々の力になり元気玉になったのが、皆さんからの感謝の気持ちです。防衛省には、毎日のようにメール、ツイッター、FAXといったありとあらゆる手段で応援メッセージが届いていました。それを防衛省が現場に全部送っていました。ですから、現場のどこに行っても応援メッセージがあつて、電話帳の厚さくらいありました。気持ちが折れそうな隊員は、それを見て、「俺たちを応援してくれる人がいるのだ」ということを励みにして活動をしていたというのが実態であります。

さて、皆さんも、おそらくいろいろな報道番組をご覧になったと思いますが、発災した当時、津波が来たから逃げろということでビルの上に駆け上って一夜を明かす。そして、翌日になったら、津波が過ぎ去って周りが全部水浸し。「どうしよう。助けて」ということで、ビルの上から手を振ったり、SOSをシーツで書いたり、上空に向かって手を振ったりしていた光景を思い出してください。あの方々は、自衛隊のヘリコプターが舞い降りてきた時、「助かった」と思い、自衛隊のヘリコプターを天使だと思ったそうです。あの真っ黒なヘリコプターでは、とてもそうは見えませんが、天使が来たという気

持ちだったのだと思います。

そんな方々も発災から1か月、2か月経って、災害現場を飛び回るヘリコプターを見てなんと言ったかという、「うるさい」です。気持ちは分かります。また、瓦礫の除去についても、どんどん片付ければ、どんどん復興に近づいていくという思いで、日が昇るのが早くなるにつれて、早く起きて、どんどん片付けました。ところが、朝5時に起きて活動を開始したら、「うるさい」と言われました。ですから、災害現場では8時半から17時までと活動が制限されました。

そんな中で、我々は唯一、こういった全国からの皆さんの応援メッセージを元気の源にして活動をしていたというのが、実は本当の話であります。

これ以外にも、いろいろなことに取り組みました。一例をここにちょっと持ってきましたが、壁新聞です。実際に自分たちで作りました。いろいろな活動を写真に載せて印刷して配っていました。誰に配るかという、もちろん隊員に配ります。隊員も、お互いにどこで活動しているかよく知らないのです。ほかの隊員がどんなところで活動しているか。また、隊員を後ろで支えている隊員にもその新聞を配りました。さらにご家族にも配りました。自分の父ちゃんがどこで働いているのか、こんな所にいるのだということが家族にも分かるように。そして、自衛隊を応援してくださっている地域の皆さんにも配りました。駐屯地の周りの皆さんや協力団体などにも配っていました。ただ、刷れるだけ刷って配っても、枚数に制限があります。何とかならないかと思って、代わりに始めたのがインターネットです。お願いしたのが、八戸市長さんです。未だにお付き合いをさせていただいておりますが、その市長さんに、ぜひとも八戸市のホームページに自衛隊の活動を載せてくださいとお願いしました。そうしましたら、OKということで、八戸市のホームページには、未だに災害情報のところをクリックしますと当時の活動が全部出てきます。多分、市町村長でそのようなことやってくれる方は、他にいないのではないかとも思うのですが、当時の活動が写真と共に全部出ています。私の顔写真も写っていますので、ぜひとも探していただきたいのですが、別にそれが言いたいわけではありません。実は、その中に、貴重な映像があるのです。八戸駐屯地では、災害が起きますとヘリコプターがすぐ飛び立ちます。普段から待機していますので、こういったことが起こるとすぐ飛び立てる態勢をとっています。飛び立って現場の上空から偵察をします。当然、地上からも車で行きますが、ただ途中で橋が落ちたり、火災になったりすると、その先に行けないので、そうならないために空からもしっかりと偵察するのです。その時も、やはりカメラマンを乗せてヘリコプターが飛び立って映像を撮っているのですが、津波を海から陸に向かって後ろから撮っているそんな映像です。津波が陸に向かって押し寄せてくる映像はいくらでも見たことがありますが、津波を後ろから撮っている非常に貴重な映像です。その映像を撮っているカメラマンが、「うわ〜」と撮りながら叫んでいます。きっと、逃げ惑う車、そして人々が見えたのかもしれない。そんな映像を撮っている自分自身が怖かったのかもしれない。そして、飛びながら、「逃げ

ろ」「速く逃げろ」とつぶやいています。こんな声はとても地上には届きませんが、そんな気持ちだったのでしょ。その映像が先ほどの八戸市のホームページで、YouTube（ユーチューブ）を通じてご覧いただくことができます。記憶を絶やさないためにも、ぜひ皆さんに見ていただきたいと思って紹介しました。

大体、時間になりつつありますので、もうちょっと聞きたいというところで止めるのがちょうどいいと思いますが、これだけは話したいと思います。

「自衛隊をなめんなよ」という話です。別に、今日来られた方に喧嘩を売っているわけではありません。実は、不眠不休で活動しております自衛官の奥さんが、災害派遣に行ったきり戻ってこない旦那に向かってメールを打ちました。大変心配だったのでしょ。一体全体うちの亭主はどこに行っているのだろうと心配をされて、「大丈夫ですか。無理しないでね。」という優しいメールを送ったそうです。私なんかもらったことないです。すると、忙しい最中でありましたけれども、ご主人は次のように答えたそうです。「自衛隊をなめんなよ。今無理しないで、いつ無理するのだ。言葉に気を付けろ。」と。私、これをお話する度に鳥肌が立ちますが、皆さんはどうでしょうか。この言葉の中に、まさに自衛官の責任感、使命感の全てが込められている。そして、自分たちが最後の砦だという自覚、言い換えれば、意地みたいなものが入っているのではないかと思います。皆さんが自衛官の活動の様子をテレビ等でご覧いただいて、どういう印象を持たれているのか、非常に私も関心がありますが、黙々と文句も言わずにやっているというようなイメージ、印象ではないでしょうか。

そんな自衛隊も、昨年暮れに最後の部隊が撤収しました。今年は、部隊に戻って去年できなかった訓練を一生懸命やっています。今年の夏休みはなかったという部隊もありました。去年訓練できなかった分、今年は休みなしで訓練するというわけです。自衛隊に対する期待、評価が大変高くなっていて、我々も嬉しい限りであります。そんな中、私もいろいろな所で講演しますと、自衛隊はもっといろいろな所でPRしたほうがいいと言って応援してくださる方々がいらっしゃいます。大変嬉しいですけども、我々は今のままでいいと思っています。寡黙な自衛官像であっても構わないと思っています。最近映画になりました「海猿」。皆さんもご覧になりましたか。映画は海上保安庁が舞台ですが、実は自衛隊にも似たようなのがいます。「言わ猿」といいます。（笑）なぜ言わないか。理由があります。

実は、自衛官より凄い方々がおられました。どなたかお分かりでしょうか。被災された皆さんです。我々は毎日、被災された皆様と接していました。とにかく、先ほども紹介しましたが、「なんで我慢するの」と思いたくなるほど、辛抱強くて、我慢強くて、決して乱れないで、整然として冷静でいらっしゃいました。もうちょっとわがままでもいいのではと思いたくなるのですが、皆さん本当に大人で、驚きでした。日本人って本当に優しくて逞しいと思いました。ですから、我々も、そんな皆さんと接して、被災された皆さんに負けたくないと思いました。時には負けそうになるのですが、逆に皆さん

から背中を押されたというのが、実は本当の話です。10万人の自衛官が皆そう思って、今回、黙々と災害派遣に臨みました。

そして、私の今日のお題でもありますが、活動の実態はそうだったのだということ、ぜひ、皆さんに知っていただきたいということでお話をさせていただきました。

さて、今日は、「東日本大震災における自衛隊の活動の実態は!？」ということで、約1時間お話をさせていただきましたけれども、既に発災から1年半以上が過ぎました。この講話を聞かれて、知らなかったこと、改めて疑問に思ったこと、いろいろあったと思いますが、冒頭申し上げましたように、お仕事とか、家庭とか、家族のこととか、いろんなところで役に立つような点があれば、ぜひ、そういったことを生かしてもらいたいというふうに思います。

最後に、私見でありますけれども、私の感想を少しだけ述べさせていただきます。

今回の東日本大震災は、日本人が日本を見つめ直す機会だったと思います。さらに、再評価、あるいは日本人の底力を知った1年ではなかったかと思います。改めて、日本をもっと知りたい、日本人はどんなのだということも多くの方々が思ったのではないかと思います。日本にとって何が大切なのかに気付かされた1年だったと私自身も思っております。

復興は未だあまり進んでいないというふうに思います。この復興も大切ですが、それ以上に、日本人1人1人が輝くことがまず大切だと私は思っています。ものづくりばかりではなく、心、メンタルの部分も復興しないといけないと、私は現場にいてそう感じました。こういったことを、若い人たちもぜひ知ってもらいたいし、この記憶を絶やしてはいけないと思います。

新潟地方協力本部では、そういった意味で、一生懸命活動しております。各小学校、中学校、こんな所あんな所にも行って、お話をさせてもらって、多くのお子さんたちに、日本人として誇りを持って、将来活躍してもらいたいという話をしています。私の勝手でありますけれども、自衛官というよりは、大人として、そして日本人としての期待があります。このようなこともやりながら、一生懸命取り組んでいるということを紹介させていただきました。

長時間にわたりまして、話を聞いていただきましてありがとうございました。以上で私の話を終わります。ありがとうございました。

【司会】

これよりただ今の講演につきまして、質疑応答を始めさせていただきます。ご質問のある方は挙手をお願いします。

係の者がお席までマイクをお持ちいたします。

【質問者1】

大変貴重な体験談、ありがとうございました。私どもは、新聞、テレビで見て驚くばかりだったのですが、実際に救助のために現地へ入られて活躍された自衛隊の方々は大変ご苦労様でございました。そんなことでちょっとお聞きしたいことがあります。予備自衛官と即応予備自衛官の違いを教えてください。

【吉田 1 佐】

基本的には、昔、自衛官だった方々です。ただ、採用の区分が若干違います。

即応予備自衛官はほとんど我々と同じような活動をするための訓練もやっております。実際に災害現場で、行方不明者の捜索などの活動にも直接参加しております。

予備自衛官の方は、災害現場ではなくて、がら空きになった駐屯地の警備とか、現場におきましても、警備に関わるような仕事等に就いています。

当然お給料も違いますし、訓練期間が違いますので、そういったことで区分が違います。

【質問者 2】

この長岡市も、昭和 39 年の豪雪や近年の地震、あるいは水害等で自衛隊からお世話になっているわけで、毎年、市あるいは町内会でも、防災訓練等もいろいろ行っています。そこで、自衛隊のノウハウというのを、もっと地域の皆さんに教えていただく機会を持っていただきたいというふうに思っております。

【吉田 1 佐】

分かりました。ありがとうございます。この後、新潟県の防災担当の方がお話されるので、そういった話も出るのではないかと思います。

【質問者 3-1】

私が知っている方も、自衛隊を退官されて家にいるのですが、緊急時には派遣要請があると行かなければ駄目だし、そのための訓練に年 1 回くらい呼ばれるという話を聞いているのですが、こういう緊急事態の時にはその方々の対応はどうなっているのでしょうか。

【吉田 1 佐】

まさにその方が予備自衛官です。普段、（救護活動？）や自営業をされている方で、何かあったら呼び出されるということです。

【質問者 3-2】

この度もそのような招集がかかっていたわけですか。

【吉田 1 佐】

はい、全国にかかっています。確か予備自衛官の方は、東北と北海道のごく限られた所だけでした。それから即応予備自衛官は全国から集まっていました。この招集に何度も何度も、結局3ヶ月間くらいずっと出尽くした即応予備自衛官の方が、私の記憶では全部で10人くらいおられました。非常に自衛官より精強な即応予備自衛官もいたぐらいということですよ。

【質問者 4】

吉田 1 佐のお話、大変興味深く聞かせてもらいました。実は、私の従兄弟が岩手県の大槌町と山田町におりまして、私もすぐに行きたかったのですが、自衛隊の皆さんが活動されている所や、道路が繋がってない所もあり、またガソリンがないということで、皆さんが撤収して何か月くらいか経ってからですが、私も行きました。その時、釜石市の町の坂をずっと下りて来たのですが、あの時の印象が非常に強烈でした。町内の皆さんに話をして、どんなだったかと聞かれると、歴史の教科書の広島原爆の後や、東京大空襲の後の写真を見たことあるだろうと思うけれど、それと同じだと話しています。鉄筋コンクリートの建物がぽつんぽつんと建っているだけで、後は全て壊滅しているという状況の中で、まさに一生懸命働いてきた自衛官というのは本当に大変だったと思います。

私は、従兄弟がいたものですから、いろいろ連絡しているのですが、お話のとおり、我慢をしています。私の従兄弟の場合ですが、心にストレスがたまってしまうようになってしまったのは、すぐではなくて、皆様の活動が一段落して、いわゆる仮設住宅に入ってからだそうです。その頃、病気になったとか、人に会いたくないとか、話をしたくないという、そういったものがどんどん出てきたということで、私も物を送ったり、電話をかけたりと、ずっと今でもやっています。話を聞きますと、一段落した時にそういうものが出てくるため、自衛隊の皆さんは既に1つの大事な仕事を終わらせて、お帰りになったわけですが、これからもずっとアフターフォローというか、「絆」という言葉があるように、ケアをこれからも繋げていかないと、本当の支援にはなっていないと思います。例えば、心のケアについても、もし計画があるならば、聞かせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

【吉田 1 佐】

自衛隊が地域の皆さんのために心のケアをするということですか。それは多分ないと思います。それは、自衛隊の責任ではなくて、たぶん各市町村の話だと思います。

先ほどの話の中で少し参考になればと思いますが、人間の気持ちはコップと同じです。コップの中の水そのものがストレスだと思えば、当然コップの容量によって、ストレス

が溢れる人もいるし、溢れない人もいます。また、もう終わったからいいというものではない。実はたまっていますので、新たなストレス、例えば復興がなかなかおぼつかない、自分の職がなかなか見つからない、家族との関係もなかなかぎくしゃくしているなどのストレスが積もると、一杯になって溢れてしまい、結局、いろいろな病気になってしまうという1つの原因です。ですから、ぜひともそうならないように、ストレスを発散するように話をしたり、何かおいしい物を送ってあげたり、そのようなことのできることもあるのかというふうに思います。

【司会】

ありがとうございました。それでは、大変恐縮ですが、質疑応答はこれまでとさせていただきます。吉田本部長、ありがとうございました。

(館内拍手)

皆様、続きまして、引き続き講演の準備をいたしますので、しばらくお待ち下さい。

それでは、第2部「新潟県における危機管理について」を始めます。

講師は、新潟県防災局危機対策課・澤野一雄参事です。澤野参事は、災害対処危機管理のエキスパートとして、自然災害への対応や防災訓練等への指導・助言を行う等、県民の安心安全に不可欠な業務を担っておられます。地方行政の現場からの貴重なお話をどうぞお聞きください。それではご講演、よろしく願いいたします。

【第2部 新潟県防災局危機対策課参事 澤野一雄 様】

皆さん、こんばんは。澤野でございます。中越大地震にしろ、東日本大震災にしろ、離れたところで経験したのですけれども、現地にいたら凄く大変なのですが、ある程度離れると、2、3分ユラユラ揺れていてなかなか収まらない。そういうときは、遠くで大変なことが起こっている。だから、東日本大震災の時は、札幌にいたのですが、なんか揺れていると、もう終わったのかと思ったらまだ揺れていると。これは大変なことがあると、すぐにテレビのスイッチを入れて、ずっと見ていたら、先ほど第1部講師の吉田本部長が言われたように、津波がドンドンきて、船が流される、人が流されるという事態になったというような感じがします。やはり危機はいつ起きるか分からないと思いました。

新潟県ですけれども、新潟県では、新潟地震から始まりまして、中越大地震、中越沖地震。そして、最近あった東日本大震災と一緒にあった長野県北部地震。水害についても羽越水害、そして平成16年、19年の豪雨水害。雪害については毎年起こっている感じで、こんなに多いのかというのが私の正直な感想でございます。先に、奈良県十津川村で災害がありましたが、どこの県も大体、何十年に1回の災害だとか、30年に1回の災害だというけれど、新潟県は2、3年に1回災害にあっているというのが、残念

ながら実態という感じがします。

そういうわけで、新潟県の泉田知事が今から8年前に就任された以降ですけれども、羽越水害や平成16年の中越大地震を受けまして、豪雨災害や地震災害への対応をどうするか、防災体制を強化する、あるいは計画を見直すというようなことを頑張っている途中で、平成19年に中越沖地震が起きました。まだまだ平成16年の中越大地震の後始末も終わっていないという状態でした。

やっと平成21年に危機管理センターや防災情報システムが整備されまして、その後、平成23年に新潟県の豪雨災害が起きたという状況です。さらに、今回、地域防災計画を一部見直して現在の危機管理体制になっているというのが現状です。

県ではしっかり対応方針を定めまして、いろいろなことに対応しています。まず、県の危機管理の憲法というのが危機管理対応方針です。中国産餃子による健康被害であれ、天窓からの落下事故などであれ、関係ないと言いながら、いろいろなことをやっています。要は「危機の芽」になりそうなことについては、新潟県でも起こるのではないかとということで対応しています。さらに県外の災害に対しても、インドネシアでの地震、中国四川省での地震、鹿児島県の風水害や北海道の竜巻などにも対応して、現地に行っているいろんな情報を集めて県に報告することになっています。九州で7月に災害が起こった時も、いきなり「お前行って来い」ということで、2泊3日で北部九州、福岡、大分、熊本を回って現地を確認して、各県庁に慰労金を渡してきました。このように、新潟県内だけではなく、他県の災害にも何か役に立つことがあれば、我々が派遣されております。必要があれば、県としてもそれぞれ被災された所でお手伝いするという考えです。これは、特に、長岡・中越大地震でよその県に大変お世話になったことへの恩返しをどこかでやろうというのが根本で、それぞれの県に行って、お手伝いできることがあればお手伝いしようというのが基本的な考えです。

危機にもいろいろあります。まず、「災害」。これは分かりやすいです。あと、「武力攻撃事態」。「その他の危機」というのが非常に分かりにくいのですが、例えば、熊とか蜂によるものです。本当に危機なのかと思いますが、やはり怪我された方もおりますので、それにも対応しているということです。

次に、危機の対応区分です。大規模自然災害とか重大事件については、災害対策基本法で対応し、あとは国民保護法でそれぞれ対応することとなっています。危機といってもいろんな危機があり、災害だけではなく、大きな事故、重大事故というものも含んで対応しています。ここには書いてありませんが、新潟県の場合は昔、県の議員さんが刺されたというような事件がありましたので、それも含んで対応できるようにしております。

危機管理の体制ですけれども、ここに書いてあるとおり、上から説明します。まず、危機をすぐ察知しなさいということです。これは感覚の話で、先ほど言いましたように、地震があった時に、ただ揺れていると思うか、何か大変なことがあると思うかということで、つまり、目を向けるか向けないかです。目を閉じてしまうと、途端に後の対応が

完全に遅れます。そして、第1報です。とりあえず間違ってもいい、空振りでもいいから第1報を入れます。第1報で皆が目覚めます。間違ったら、「良かったね」で済みます。ところが、対応が1歩遅れると全部遅れてしまいます。やはり情報をしっかり感覚をもって集めて、第1報の処理をする。そして何かあったらすぐに職員を集めさせる。そして、情報収集と分析共有。そして、迅速的確な応急対策をする。そして、これが大切なのですが、県民の皆様に分かりやすく情報を提供する。やはり情報提供は大事かと思えます。ただ、情報提供しているつもりでも、なかなか皆さんのところに届かないというのが実態だと思います。それは、我々の努力が足りないと思って、引き続きいかに集団で情報提供するかということを考えていきます。

次に県の体制ですが、24時間の宿直体制をとっております。防災局の危機対策課に県の職員が24時間宿直しております。自衛隊みたいに起きてはいないのですが、そこにて、FAXが来ればすぐに対応できるような体制があります。さらに、大雨警報等が発令されると、危機対策課の職員が1人増強される体制になっております。したがって、通常は2人、何かあれば3人、必要があれば4、5人と警戒態勢を強化していきます。また、初動マニュアルの整備をして、いろんな訓練を実施する。自衛隊も含んだ関係機関との協力体制を構築する。危機管理センターの整備をして、情報通信技術を活用しながら情報の収集・発信をしていくというのが今の県の体制であります。

平素の基本的な体制についてですが、知事がいて、副知事がいて、危機管理監、そして各局長がいます。防災局長の下にいろんな課があります。私がいるのは左から2番目の危機対策課です。この中で特徴的なのが危機管理監です。昔は防災局長の下にいたのですけれども、現在は部局長よりも上位に位置付けて、何かあれば部局長を指揮・統制するという機能を付与しました。災害が起こったならば、危機管理監の統制の元に行動できるようになっています。自衛隊の組織と県の組織で大きく違うのは、自衛隊の組織は、危機管理組織であるということです。何かあることを前提にした組織です。県は普通の業務のための組織で、危機自体があるということを前提にして組織をつくっていません。普通の行政サービスができる体制でつくっています。縦割り行政と言われますが、縦割りが一番いいのです。それぞれの人に権限を付与しているので、何でも迅速にできます。いちいち上まで決裁を受けていると、1つ申請するたびに印鑑をもらうのに3日も4日もかかるというのでは大変です。住民票出すのに3日も待ってくださいなんて言ったら大変なことです。やはり、窓口にいる職員が権限を持って住民票を出せるようになっている。それが県や市の体制だと思っています。したがって、その平常時の体制を、危機があったらなんとか危機の体制に移行していくというところが、県としては1番大事なのではないかと、もしくは市町村として1番大事なのではないかというところでございます。

次に、危機が発生した場合を説明します。危機が発生したならば、まず情報連絡室で情報を集めます。次に、警戒しましょうとか、もっと災害が起こりそうだとか、もしくは

は起こった場合については、災害対策本部という本部体制を作りまして、危機対応をしていきます。災害対策本部要員は事前に指定しております。本部体制につきましては、本部長である知事を頭に、統括調整部という、自衛隊でいう幕僚組織ですけれども、いろんなところを統制する組織があります。情報を集めたり、分析したり、広報をするようなところなんです。そして、応急対策部というところがあります。応急対策部には、平時組織連携型の部分と対応完結型の部分がございます。保健医療・教育・生活基盤・治安対策については、平素の県の組織を中心に対応していく平時組織連携型の部分です。それとは別に、災害の時の対応完結型の部分は、災害が起こった時の対応ということで、それぞれ関係のある部署から人を集めまして、被災者救援部、食糧物資部、生活再建支援部に分けて編成しております。この要員につきましては、300人程度を事前に指定しています。ただし、その中で来られない人もいるだろうから、実際は220人程度でこれを動かせるようにと考えています。300人いて全員来られると思ったら大間違いですから、多めに要員は指定しております。これが県の災害対策本部の体制です。

次に、総合防災情報システムを説明します。先ほどの組織で皆さんにどうやって情報を提供するのかというと、ヘリテレ、ヘリコプター、あとはいろんな現地に行って調べたものや国交省のデータ等の情報を収集します。それを県庁内で共有し、各市町村、もしくは防災関係機関に対して情報を発信します。皆様方については、インターネット等の手段を使って情報提供しているというのが現状です。ただインターネットが主体なものですから、パソコンを使わない人はあまり見られないかもしれません。県では、防災専用ホームページである「防災ポータル」を設置しています。これが、パソコンで見ることができる「新潟県防災ポータル」です。防災ポータルを開くといろんな情報が入っています。雨量だとか、河川水位だとか、あとは気象庁が発表したいろんな情報がこの中に入っています。また、鉄道、バスの情報、それぞれJR等、空港や電気・ガス会社さんとリンクをして情報が分かるようになっております。例えば、避難勧告が発令されている、避難指示が発令されている、あるいは避難所の位置はどこかなどについても、ここで場所が分かるようになっております。給水場所がどこだというのも地図で分かるようになっております。これにつきましては、先ほどパソコンといいましたけれども、携帯電話でも同じようなものが見られます。携帯電話でも地震の情報、気象注意報等が見られるようになっていきます。ほとんどの方が携帯を持たれていると思いますので、ご覧いただくことができると思います。さらに、NHKだけなのですが、市町村が避難勧告を発令したら、この防災システムを使って、直接NHKの画面に避難勧告のテロップが流れるようになっていきます。NHKの放送を見ていると避難勧告が出た地域がそのまま出るようになっておりますので、ご確認していただければと思います。他の放送局でもやろうと思うとお金がかかるみたいで、今のところNHKだけでやっている聞いております。

次に、去年の豪雨災害についてです。皆さんご承知のとおり、強い雨が広範囲に長時

間降りました。記録的短時間大雨情報が30回。記録的短時間大雨情報というのは、気象台が発表する数年に1度程度しか発生しないような短時間に降る大雨の情報のことです。気象庁が数年に1度しか発表しないような大雨が30回発生したということで、150年分の雨が3日間で降ったとご理解していただければいいかと思います。そして、これが平成16年豪雨との比較図ですけれども、やはり平成23年のほうが広い地域にたくさんの雨が降ったということが一目で分かると思います。

これは、県内河川の破堤状況で6河川9箇所が破堤しております。そしてこれが被害等の比較表です。これは、災害救助法適用市町村を示した地図ですが、平成16年豪雨災害と比べて、広い地域に災害救助法が適用されています。そこで、県が何をやったのかというと、避難所の設置、福祉避難所の開設、安否確認、健康面でのケア、ボランティアセンターの開設等を実施しております。

そして、この後10月から平成23年豪雨災害に対する住民アンケートを実施しました。調査地域は、見附市、十日町市、南魚沼市及び阿賀町で、避難勧告等が出された地域の1,000人に対してアンケート調査を実施しました。長岡市が何で入っていないのだと思うかもしれませんが、長岡市は避難指示が非常に多くて、1,000人の対象ではちょっと多かったものでカットさせていただきました。とりあえず40%の回収率で400人から回答があったのですが、100人でも200人でもほとんどデータは変わりませんでした。避難指示や避難勧告という用語を知っていますかという問では、知っているという人が大体75%。避難準備情報という用語については、言葉も内容も知っているという人が約5割。土砂災害警戒情報という用語については、やはり5割くらいは知っているけれども、残りは知らないという結果でした。我々も宣伝が悪いのですけれども、中身の意味をしっかりと伝達、もしくはお知らせする必要があるのかなということで、関係の部署には申しております。

次に、どんな時に避難しましたかという質問では、人から勧められて避難したという、要は自主防災組織なり消防団の勧めで避難したという人が約半数です。あとはやはり怖いと思ったからという答えでした。これは当然だと思います。雨の降り方が違う、避難勧告が出た、自宅にいと不安だから、川があふれそうだから不安など、これは分かります。やはり、いろんな人の勧めで避難する、という人が約半数いるということをご理解いただければいいと思います。要は、被害情報はあったものの、誰かが逃げろと言ったらから逃げる。逃げたら助かる確率が増えるというところの1例ではないかと思えます。

次に、避難しなかった理由です。自宅が安全と思ったからが約半数の54%。これまでに災害が起こったことがない、災害が起こりそうな雨ではないと思った方もおられます。自宅が安全だと思ったのは本人の思い込みだけかもしれません。災害が起こった時、皆さんがいうのは、ほとんど「うちでまさか起こるとは思わなかった。」という言葉です。やはり、起こるかどうかわからないのですけれども、しっかりそこは事前に考

えておく必要があるのではないかと思います。次に、今後どうしたら避難しますかと聞いたら、やはり皆さん、危険が分かれば逃げる、繰り返し避難勧告が流れれば逃げる、直接避難を呼びかけられれば逃げる等々です。やはり危ない、もしくは人から誘われると逃げるとおっしゃっています。これがアンケート結果です。

次に、全く話が変わりますが、これはテポドンというらしいです。正式にいうと、北朝鮮の人工衛星と称する飛行体らしいのですけれども、こういうことに対しても情報収集・提供のための活動を行いました。3月16日に関係の情報共有連絡会議を行いました、ミサイルが発射された後の4月13日に解きました。何でこういうこともやるのかといいますと、あの時は沖縄だったから来ないと思ったのですけれども、もし万が一、北朝鮮ですから、沖縄と九州と新潟を間違えて発射する可能性もあるというところで対応したというところです。

最後に、新潟県は平成21年3月に新潟防災戦略というものを作りました。これはみんなの力で効果的に災害に対応とするというところで、互助・自助・共助・公助が大切だということです。特に私は、自助と互助を地域で行うのが大切だと思っています。自衛隊はすぐ来てくれると言いますがけれど、北海道から来るのに3日、4日かかります。やはり1日、2日は自分で何とかする、何とか生きる、何とか逃げるということが大切ですので、まず自分で、次に地域で、そして公助ということになるのではないかと思います。公助というのは、どうしても共通項で支援せざるを得ないので、個々の細かいところまでなかなか手が回りません。やはり、個々のかゆいところに手が届くというのは、地域の皆さんじゃないかと思っています。そして、新潟防災戦略における災害予防のポイントですが、基本的には、災害を知ること、自分の住まいが安全かを確認すること、これだけをやっていたいただければいいと思います。災害を知るというのは、うちは雪が多いということを知るということではありません。自分の家は土砂が来るのか、水が来るのか、河川があふれるのかということを知ることです。これが分かれば、後は全部対応できます。自分のところは、ここが破堤しても家の2階は大丈夫なのだから、2階に逃げればいい。ここが破堤した場合は、家は2階も駄目だからよそに逃げざるを得ない。そういうところで、まず自分のところの災害を知って、そして自分の住まいが安全かどうか確認するということが大切だと思います。

最後に、災害はいつ起こるか分かりません。先ほども言いました、互助・自助・共助・公助。しかしながら、公助に限界があることも事実です。「自らの命は自ら守るために備える」自助、「地域で支え合う」互助、ボランティア・企業等による「共助」による備えを整えて、平素から備えることが大切です。災害が起こったら計画がありません。計画を作ると、防災計画があるからと安心するのですが、大事なのはそれを使って柔軟に対応することだと思います。それを現地に対応させていくということが大切だと思いますから、平素から備え、そして何か起こった場合、備えた事項に基づき、自らの判断により柔軟に対応していただければと思います。これで、新潟県は何をしているかという

話を終わらせていただきます。

【司会】

これより、只今の講演につきまして質疑応答を始めさせていただきます。ご質問のある方は挙手をお願いします。係の者がお席までマイクをお持ちいたします。

はい。お願いします。

【質問者 5-1】

大変ありがとうございました。

今、直接お話ししていただいた内容ではないのですが、ちょっと質問したいと思います。

先般、9月に、南海トラフあるいは首都直下が起きた場合の被害想定がマスコミ等で流れました。南海トラフで3連動が起きた場合は300万人以上の被災者が出る。首都直下マグニチュード8クラス以上の場合、10万人の方々が亡くなる、というような内容でした。そういった中で、首都機能の移転を考えているという国の政府の方針が出ていて、一応、首都機能の分散ということで、候補地としては、名古屋、大阪、福岡、仙台、札幌と太平洋側ばかりです。新潟県側、日本海側に何も無いわけです。特に、この長岡地区は、いろいろな経験をしていますので、国の防災センターとか、備蓄所、あるいは避難所、ヘリポートといったものを備えた防災基地のようなものを長岡地域に誘致ができないのかと思います。例えば、長岡ニュータウン周辺に約1千haある西山丘陵は、縄文人のような人が住んでいた所で、地震、災害に強いところですか。

【澤野参事】

首都機能の移転については、何とも言いようがありません。いずれにしろ、東京の首都機能をどうしようかという話は議論になっています。それではどこにするかという、いろいろあって、まとまりきれないのです。個人的には、いろんな所に若干分散させる必要があるのかと思います。1箇所では駄目だし、南海トラフの場合、太平洋側は全てやられてしまいます。個人的には、もう少し内陸のほうがいいのかと思うのですが、やはりいろんな話の中で、どことはいえないと思っています。

ただ、首都機能の話の他に、もし太平洋側もしくは首都で大地震が起こると、この前の福島と同じような現象で、新潟や北陸に避難者の方がいっぱい来るのではないかと思います。どちらかといえば、新潟県としては、そちらの避難者の方をどうやって受け入れるのが、まずは先かと思います。今も1万人ぐらいの人がまだ福島から来られていると思いますが、1万人単位でも、避難場所は結構大変です。困ると言うてはいけませんが、何処に泊めていいのか、ちょっと今もないという状況です。もし、10万人規

模で東京都から来るとすると大変だということで、何万人単位の方の避難場所をどうするかというのは今も考えております。ちょっと答えになっていませんけれどもよろしいですか。

【質問者 5-2】

はい。ありがとうございました。いろいろな面で、県又は国、市町村を通じて、ぜひ新潟県長岡市に誘致するようお願いできればと思います。新潟県には、米の食料はいくらでもありますので、よろしくお願いします。

【澤野参事】

はい。分かりました。

【質問者 6-1】

私は、町内の自主防災組織で役員をやっています。実は、正直非常に悩んでいます。というのは、3月の東日本大震災における災害時でもございましたけれども、消防団員だということで、地域住民の方の避難、あるいは避難指示等を優先した結果、その方が被災され、亡くなられるという事態がありました。マスコミ等でもどの辺が妥当なのかという話がありました。

私の町内でも、自主防災組織として避難訓練もやっています。昨年の豪雨の時も、最初は避難指示、それから避難勧告というようなことをやっております。しかしながら、自主組織としてどこまでやったらいいのかということが非常に悩みです。避難指示・勧告が出た時点で、どうしても避難させなければならないという方の名簿がありますから、そういった方への指示等も含めて、町内の自主防災組織の役員が、避難場所へ車で移動させたりしました。

ただ、例えば、豪雨のために川が決壊した場合、救済に行った自主防災組織の役員が被害に遭うこともあると思います。また、各組織の会員の方が被害に遭う場合もありますので、そのような中で、どこまでやっていいのか悩んでいます。アドバイスとかありましたら、よろしくお願いします。

【澤野参事】

アドバイスになるかどうか分かりませんが、東日本大震災の時に消防団員の方や警察の方が助けに行ったり、見回りに行ったりたくさん亡くなられたという現状がございました。消防庁の方に聞いたところによると、消防団では、「津波が来る前には必ず避難せよ」と指導しているそうです。まずは、「自分の命を守れ」ということです。私も非常に悩ましい問題だと思うのですが、やはり救助をする方、特に自主防災組織の方が命を張ってまで助けられるかということ、そこは問題があるのではないかと、個

人的には思います。やはり、自分の命が助かる範囲でということになるかと思います。したがって、津波の場合は判断が非常に難しいのですけれども、水害や雪害の場合なら、徐々に来るものや起こりそうだとかなど、何となく危ないというものが分かると思いますので、そこは早めに逃げるということがまず大切ではないかと思っています。ただ、お婆ちゃんがそこを走っているのに置いていけるかというところは、大変難しい問題です。私の個人的な考えですが、よろしいでしょうか。

【質問者6-2】

はい。私も自主防災組織の会員の方については、とにかく自分の身の安全だけは確保しなさいと、その上で、何かできることがあったらやってくださいと話しています。けれども、今回の避難勧告の時も、各連絡係員全員に援助しなければならない方の所に行っていたのですが、寝たきりの方もおられますし、指示できないというのが現実でもありました。最終的には、これ以上は対応できないため、消防団の方をお願いするしかないと思っていました。ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。お時間がまいりましたので、これで質疑応答を終了させていただきます。澤野参事、ありがとうございました。

皆様、今一度盛大な拍手をお願いいたします。

(館内拍手)

以上をもちまして、第24回防衛セミナーの全てのプログラムが終了いたしました。本日は誠にありがとうございました。